

Strix 12 : 183-187 (1993)

## 山里におけるツグミのねぐらとその環境

平野小二朗<sup>1</sup>

### はじめに

山里の畑などの平地で採食しているツグミは、多くは山地をねぐらとしていることが知られている(中村・行田 1984)。しかし、ツグミが群れで眠るのか、単独で眠るのか、また群れになる場合はどれほどの規模になるのかなど、その実態はよくわかっていない(樋口 1990, 浜口ほか 1992)。今回、著者はこれらについて観察を行ない、いくつかの知見を得たので、ここに報告する。

### 調査地および調査方法

長野県須坂市の南部に位置する妙徳山(最高点の標高1293.5m)の山麓を流れる鮎川の右岸に定点を設け、その真向かいの妙徳山の北斜面を観察区域として、定点観察を行なった。観察定点からねぐらまでの距離は、直線距離にしておよそ800mから2500mである。記録した項目は、天候、時間、個体数、ねぐら入りの場所、およびその環境である。また、この観察地点から近いところにねぐら入りした時は、ねぐらの観察も行なった。観察期間は、1993年1月11日から5月4日まで合計46日、ねぐら入りの時刻は、15時50分から18時30分のあいだであった。ツグミが採食している定点の周辺は、リンゴおよびブドウの果樹園と田および畑である。定点の標高はおよそ480mであり、観察区域は、標高およそ山麓で600m、中腹で800m、山頂付近で1000mほどで、面積は約180haである。植生は雑木林(40%)、カラマツ林(30%)、マツ林(5%)、スギ林(20%)、低木のやぶ(5%)などから構成されている。

### 結果および考察

ツグミは、ねぐらとする場所を個々にとるのではなく、ある程度まとまった集団で利用しているが、各個体は接近して眠りにつくのではなく、数m以上離れていた。時間が遅くなってからは平地の低木のやぶなどを利用する個体もあったが、このときはほとんど単独であった。また、ねぐらとする場所は日ごとにかわるのではなく、おおむね定まっていた。観察されたねぐらの総数は87か所、総個体数は338羽であった。

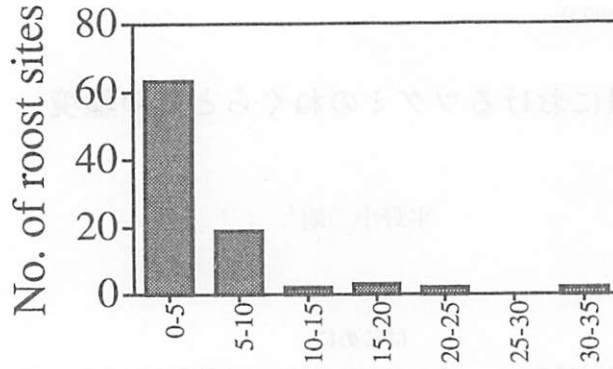
#### 1. ねぐらの規模

同一のねぐらに入る個体数をねぐらの規模とした場合、5羽未満のねぐらの数は63か所(73%)、それに入った個体数は112羽(33%)であり、5羽以上10羽未満のねぐらの数は

---

1993年12月28日受理

1. 〒382 長野県須坂市明徳 23-10



## No. of individuals in each roost site

図1. 規模別のねぐらの観察数.

ねぐらの規模とは各ねぐらにおける個体数を表す.

Fig. 1. No. of roosts observed for each roost size.

The roost size is number of individuals at each roost.

18か所 (21%), 115羽 (34%) で, 10羽以上15羽未満のねぐらの数は1か所 (1%), 10羽 (3%), 15羽以上20羽未満のねぐらの数は3か所 (3%), 49羽 (14%), 20羽以上25羽未満のねぐらの数は1か所 (1%), 22羽 (7%) で, それ以上は30羽入ったねぐらが1か所 (1%), 30羽 (9%) であった (図1). ねぐら1か所あたりの個体数の平均値±S. D.は,  $3.89 \pm 4.80$ であり, 最大規模のねぐらは30羽であった. ほとんどの個体は, 5羽未満と5羽以上から10羽未満の規模のねぐらに入っていた. このことから, ツグミはあまり大きな規模のねぐらにはつくらないものと思われる.

### 2. ねぐらの場所

ねぐらの場所は, 標高と地形にもとづき, 平地 (標高約480m), 山麓 (標高約600m), 中腹 (標高約800m), 山頂 (標高約1000m) の4か所にわけた. 平地のねぐらの数は4か所 (5%), 11羽 (3%), 山麓にはねぐらが34か所 (39%), 102羽 (30%), 中腹にはね

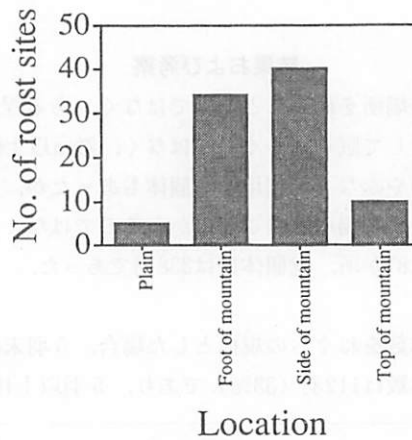


図2. ねぐらの場所とその観察数.

Fig. 2. No. of roosts observed in each roosting habitat.

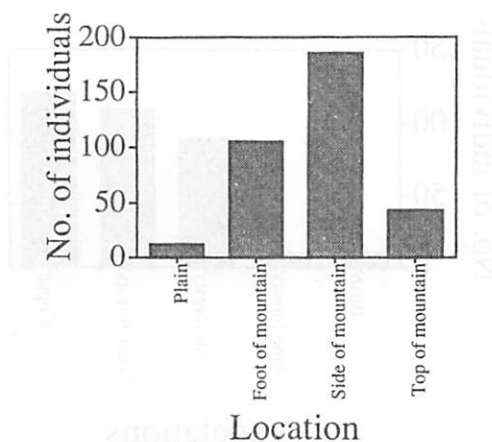


図3. ねぐらの場所とその観察個体数.

Fig. 3. No. of individuals observed at each roosting habitat.

ぐらが39か所 (45%), 184羽 (54%), 山頂付近はねぐらが10か所 (11%), 41羽 (12%) で, 多くの個体が山麓から山地中腹をねぐらとして利用していた (図2, 図3). ねぐら1か所あたりの個体数±S.D.は, 平地から山頂にむかうにつれて2.75羽±2.36, 3.00羽±3.88, 4.72羽±5.74, 4.10羽±4.15と増加した.

### 3. ねぐらの植生

ねぐら場所の植生をみると, 雑木林のねぐらの数は33か所 (40%), そこを利用した個体数は120羽 (36%) であり, スギ林のねぐらは24か所 (28%), 利用個体数は110羽 (33%) で, カラマツ林のねぐらは19か所 (22%), 利用個体数は89羽 (26%) で, マツ林のねぐらは7か所 (8%), その個体数は9羽 (3%) であり, 藪はねぐらが4か所 (5%), その個体数は10羽 (3%) であった (図4, 図5). ねぐら1か所あたりの個体数±S.D.はマツ林が1.29羽±0.76, やぶが2.50羽±2.38, 雑木林が3.64羽±3.47, スギ林が4.58羽±6.74, カラマツ林が4.68羽±5.00であった.

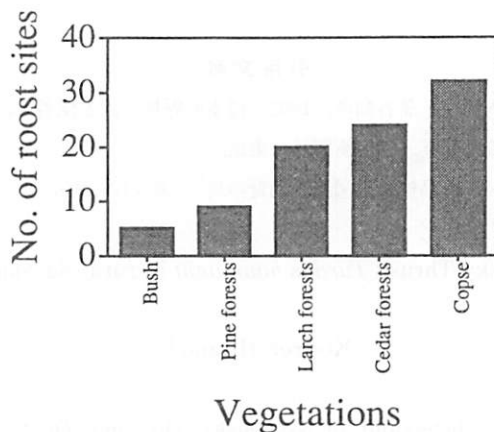


図4. ねぐらの植生とその観察数.

Fig. 4. No. of roosts observed in each vegetation type.

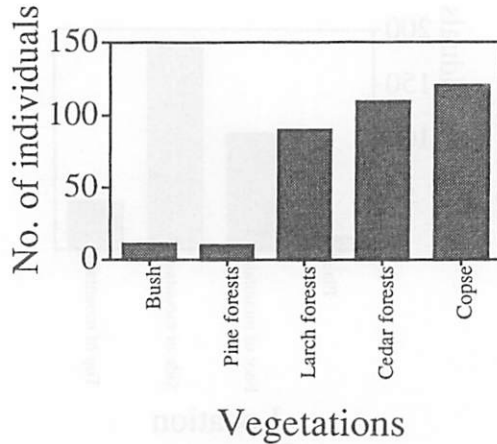


図5. ねぐらの植生とその観察個体数.

Fig. 5. No. of individuals observed in each vegetation type.

#### 謝 辞

この論文の調査、作製にあたり、日本野鳥の会研究センター藤田剛氏の指導および妻敦子の協力をうけた。厚くお礼申し上げる。

#### 要 約

1. 長野県須坂市の南部に位置する妙徳山（最高点の標高1293.5m）の北側斜面でのツグミのねぐら場所および、そこを利用する個体数を調べた。
2. 観察期間は1993年1月11日から同年5月4日までであり、観察されたねぐらの総数は87か所、観察総個体数は338羽であった。
3. ねぐらは、規模では5羽未満が63か所（73%）、場所では山地中腹の標高900m付近が39か所（45%）、植生別では雑木林が33か所（38%）、利用個体数は山麓と山地中腹がほぼ同じで112羽（33%）と115羽（34%）で最も多かった。

#### 引用文献

- 浜口哲一・森岡照明・叶内拓也・蒲谷鶴彦. 1992. 日本の野鳥. 山と溪谷社, 東京.  
 樋口広芳. 1990. 鳥たちの生態学. 朝日新聞社, 東京.  
 中村登流・行田哲夫. 1984. 野鳥検索小図鑑 [山野の鳥]. 講談社, 東京.

Roosts of the Dusky Thrush *Turdus naumanni* in rural Suzaka, central Japan

Kojiroh Hirano<sup>1</sup>

I studied the roosting behaviour of 338 Dusky Thrushes *Turdus naumanni* from 11 January to 4 March 1993 in Suzaka-shi, Nagano Prefecture, central Japan. I observed 227 (67%) birds in roosts with less than 10 birds. The roosts Located on hillsides (about 900 m

above sea level) were preferred; 184 birds (54%) roosted there. Roosts were surrounded by various vegetation, and those in copses were selected by 120 birds (36%), the highest percentage of any vegetation type.

1. Myoutoku 23 - 10, Suzaka-shi, Nagano 382